

# 偶 感

藤 田 正 夫

和辻さんの「偶像再興」は、学生時代の愛読書の一つであるが、其の中に「樹の根」という一章がある。

“美しい赤褐色の幹や、清らかな緑の葉が、松の樹の全体であるような気がしていたが、或時、地下の『根』は乱れた女の髪のように、戦い、もがき、苦しむように大地にしがみついているのを実際に目で見て驚異の情に打たれぬわけには行かなかった。彼らは秘められた地下の営みを、1日も怠ったことはないのであって、あの美しい幹の葉も、飛ぶ緑の花粉も、このような苦勞の上にのみ可能なのである。”

こういった要旨であるが、企業における「研究」も「樹の根」のようなものかと思う。外部からは一見、目立たないけれども、企業が立派な葉を繁らせ、花を咲かせるためには、「研究」という「根」の雄大な営みがなければならない。いぢけた「根」からは、天を突くような大きな樹は育たないのである。

○

デュポンは、ナイロンの研究で戦いつづけついに絹を駆逐し、社運をますます隆盛ならしめたし、デュポンと提携した東洋レーヨン今日の成功も、その素地に長年の立派な研究があったからこそであろう。更に倉敷レーヨンにおけるビニロンの研究も輝かしい前例として逸すことができない。これ等の製品が、今日の安定を獲ちとるためには、それまでに、どれほど苦しい研究が、日夜つづけられたことであろう。

当社が昨年来関係を持つに至った富山化学が、アメリカン、サイアミド会社に技術輸出した“パンフラン”の成功も、10数年にわたる文字どおり、血のにじむような刻苦を経て開花したものであることを聞いている。私もかつて同社の工場を訪れたことがあるが、北陸の都市の郊外にある一見貧弱に見える研究室で、部長の児玉氏を中心とした数人の若いグループが、必ずしも恵まれているとはいえない環境にめげず、よく力をあわせ、世男に誇る業績を挙げられたことは、もって他山の石とすべきだと思ふ。

○

最近証券界の一部に「研究費に投資せよ」という言葉が流行していると言う。研究に最も力を入れている企業ほど、将来性が買われているのである。

技術の改良、革新が、戦前とは比較にならぬテンポで前進している今日位、研究の重要性が痛感されたことはかつてない。いたずらに伝統の上に、あぐらをかいている企業は遠からず取り残されるであろう。逆に、たとえ小さくても、常にフロンティアをめがけて、良い品を安くつくり出そうとする企業だけが、それらにとって代る。ことに化学工業の分野では、発展はこ

の一筋の道以外にはない。

このように考えると、わが社懸案の研究所が、その規模は必ずしも十分とはいえないにしても、昨年夏、一応第一期工事を完成したことは誠に喜ばしいことである。

とは言え「研究」という仕事は、まことに「樹の根」のように、目立ちもせず何かと苦勞ばかり多いことも察せられる。それが、直ちに花となり、果実に直結するような研究ならばまだしも、多くの研究は、日の目を見ないで終ることさえあり、当事者としては、たまらぬ気持ちになることもある。しかし、私は、こうした一見、実らぬ研究さえも、やがては企業の大切な「根」の一つになると思う。真摯な研究であれば、当面の成果いかんにかかわらず、いつの日か必ず、企業の総合力に大きな役割を果すことを確信する。

○

かくして経営者は勿論のこと、一般の従業員諸君もこぞって、研究の重要性と、研究員の苦勞に、十分な理解を持たなければならない。この場合、永い眼で見、暖い気持ちで接することが何よりも望まれる。そのような暖い理解こそが、研究という「根」に水をやり「根」をすくすくと成長させる貴重な滋養分であることを忘れてはならない。研究にたづさわの方々も、これに応えるよう「樹の根」の気持ちで、地道なたゆまざる努力を続けていただきたいと思う。

最後に、和辻さんの言葉を、もう一度、引用して結びとしよう。

“成長を欲するものは、まず根を確かにおろさなくてはならぬ。

上にのびる事をのみ欲するな。まず下に喰い入ることを努めよ。”

(常務取締役)